

## 第4章 京都大学総合人間学部構内の立合調査

伊藤淳史

### 1 調査の概要

調査地点は、総合人間学部構内の東北部に位置する（図版1-254・255・257，図15）。すでに本年報第2章でも述べているように、238・249地点の発掘調査成果から、この一帯に中世の重要な遺構が存在している可能性が浮上してきていた。また、35・48地点など過去の試掘・立合調査においても、縄文時代～古代にかけての包含層の存在や遺物の出土が報告されていた。さらに、詳細は後述するが、1997年4月に図15-X地点において折田彦市像の撤去と樹木移植による築山整備が実施された際、近世の墓石や大量の中世瓦類などが出土していたことが工事終了後に判明し、一部遺物を回収した。

こうしたなか、1997年7月～9月、および12月～1998年1月にかけて、一帯に掘削深度が遺構面に達する複数の工事が計画されたため、適宜立合を実施するとともに、要所における遺物の回収と断面記録の作成をおこなうことにした。

調査の結果、弥生時代～近世にいたる各時代の包含層と多くの出土遺物を得たが、とくに、中世瓦の大量散布範囲が確認されたことと、弥生前期の遺物包含層が西方に向かって斜面を成してくだる状況を把握できたことは、大きな成果といえる。

### 2 層位

既往の調査区の層序もふくめて柱状図で示す（図15-A～G）。第2層灰褐色土は近世の遺物包含層。その上面のレベルは、F-G地点間で50cmほど下る。現状地形では、G地点の西側に比高差約1mの段差が存在するため、近代以降にこの段差が5m以上西へ移動し、落差も大きくなったことがわかる。大学設置に際しての造成によるものだろう。第3層の茶褐色土は中世の遺物包含層。その上面は、B-C地点間およびF-G地点間でゆるやかに下る。近世以前の段階の棚田状段差の存在が反映されているのだろう。第4層の黒色土は古代の遺物包含層。D地点以西では茶褐色土の下に安定して堆積が確認されるが、東方のA地点～L地点付近一帯では灰褐色土あるいは表土直下に堆積しており、この一帯が微高地にあたるものと推察される。第5層の黄色砂は、無遺物の洪水砂層で、弥生前期末～中期初頭に生じた土石流にともなう堆積で、京都大学構内一帯でひろく確認されている。弥

京都大学総合人間学部構内の立合調査

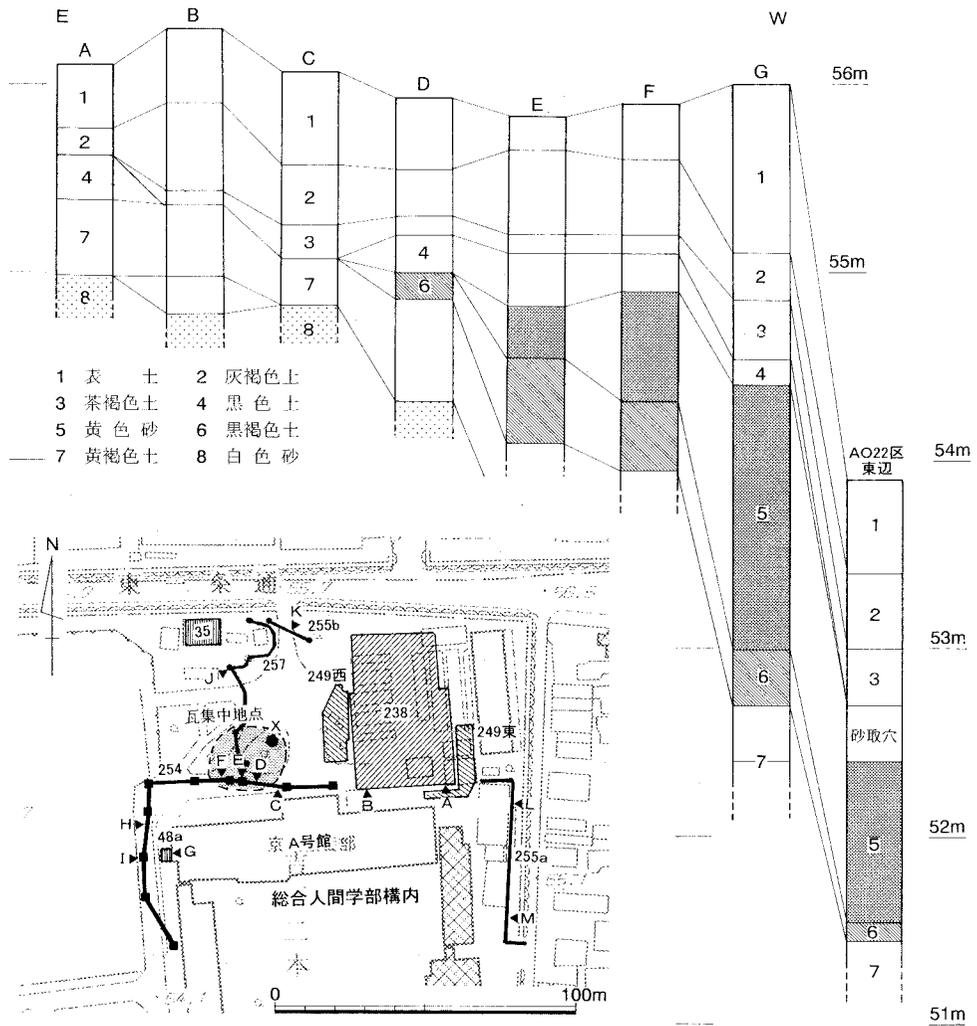


図15 主要調査地点（縮尺1/2500）と層位柱状図（縮尺1/80）

生前期の遺物包含層である第6層の黒褐色土上面を覆っており、この第6層のレベルが東へ向かって上がるにしたがい薄くなり、D-E地点間で消失する。第6層は、それ以东では第4層に接しながら堆積するが、C-D地点間で消失する。第6層の上面はおおむね弥生前期末段階の地表面を表しているの、そのころD-E地点間およびF-G地点間に西および南へやや急に下る斜面状の地形が存在したと想定できる。こうした第6層が東に向かって急激に立ち上がる状況はJ地点でも確認している。また、G地点と100m南方のAO22区の同層上面の比高差は約1.5mであるから、今回の調査地点よりも西～南一帯で

## 遺構と遺物

は緩傾斜の谷状地形が広がっているものとみられる。第7層の黄褐色土および第8層の白色砂からは、今回の調査範囲内では遺物を確認していない。

なお、西辺のH・I地点、東辺のM地点では、それぞれ表土直下で第5層の黄色砂、第7層の黄褐色土があらわれた。H・I地点付近については、近代以降に、東側から張り出してくる斜面をカットしてグラウンドのための平坦地を造り出した際に削平されたとみられる。M地点付近については、微高地にあるため、弥生時代以降くりかえし削平を被っていた可能性が高い。

### 3 遺構と遺物

工事の掘削にともなう立合調査であるため、遺構は壁面で断面を確認したものがわずかにある程度で、各所の包含層中から遺物を回収するのが精一杯であった。以下、主要なものについて説明しておく。

先史時代の調査成果としては、黄色砂の下層の黒褐色土からの遺物出土がある。いずれも弥生時代前期の土器で、多条の篋描沈線文による装飾をもつ個体为中心となっており、新段階に位置づけられるよう（図16 Ⅲ1～Ⅲ8）。遺構を確認することはできなかったものの、遺存の良いおおぶりの破片が多数含まれていることから、一帯がこの時期の遺跡の中心となっていることが、あらためて確認できた。

古代以降の成果として挙げられるのは、E地点の北側一帯を中心に検出された中世の瓦溜がある。茶褐色土中に、巴文や剣頭文など中世の軒瓦類をはじめ、一部古代の瓦もまじえた大量の遺物が広い範囲で密に包含されており、一帯で実施された複数の管路掘削時に確認できたことから、ある程度平面的なひろがりやが推定された（図15梨地部分）。ここに、古代～中世の重要度の高い遺構が存在している可能性がきわめて高く、今後十分に注意しておく必要がある。この瓦溜とその周辺の茶褐色土からの出土遺物のうち、土器類についてみると、おおむね平安時代後期と中世後半期に偏る傾向が認められる（図17 Ⅲ10～Ⅲ21）。瓦については、平安時代中期にさかのぼるものを少量含みつつ、その後期から鎌倉時代にかけてのものが出土しており、鎌倉時代のもの比率が高い。そして、いずれの時期も軒瓦が目立つように思われる（Ⅲ24～Ⅲ35）。

このほかの遺構としては、I地点で、幅・深さとも1m前後の断面U字形に茶褐色土が落ち込む状況が東西両側の壁面で確認され、10世紀ごろの土師器が出土した（図17 Ⅲ9）。東西方向にはしる平安期の溝の存在が想定される。

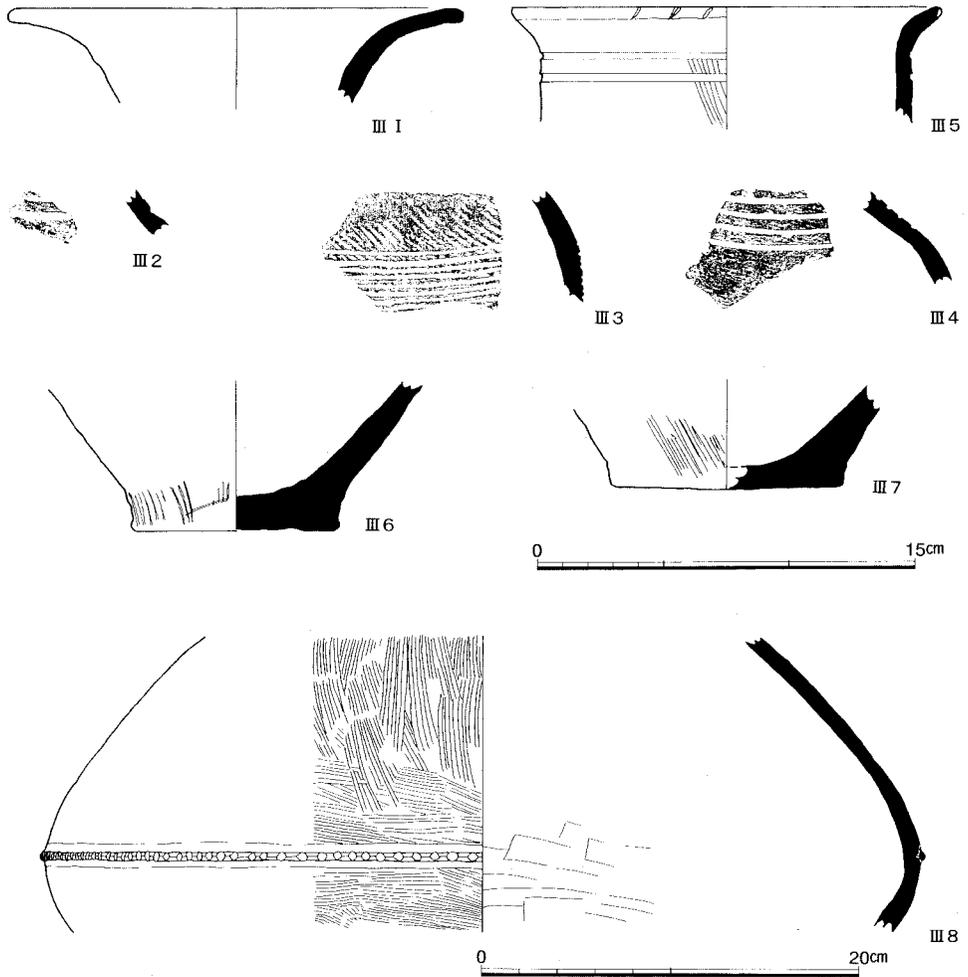


図16 弥生時代前期の土器 III 1～III 7 縮尺1/3, III 8 縮尺1/4

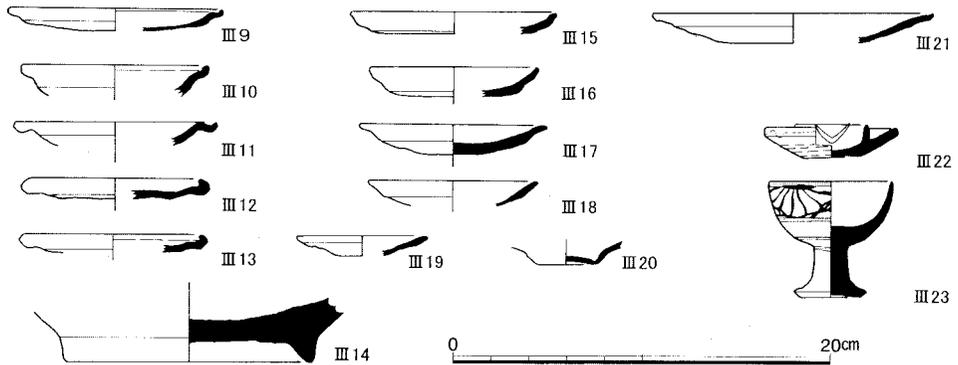


図17 古代以降の土器・陶磁器 (III 14灰釉系陶器, III 22陶器, III 23染付, それ以外は土師器)

造構と遺物

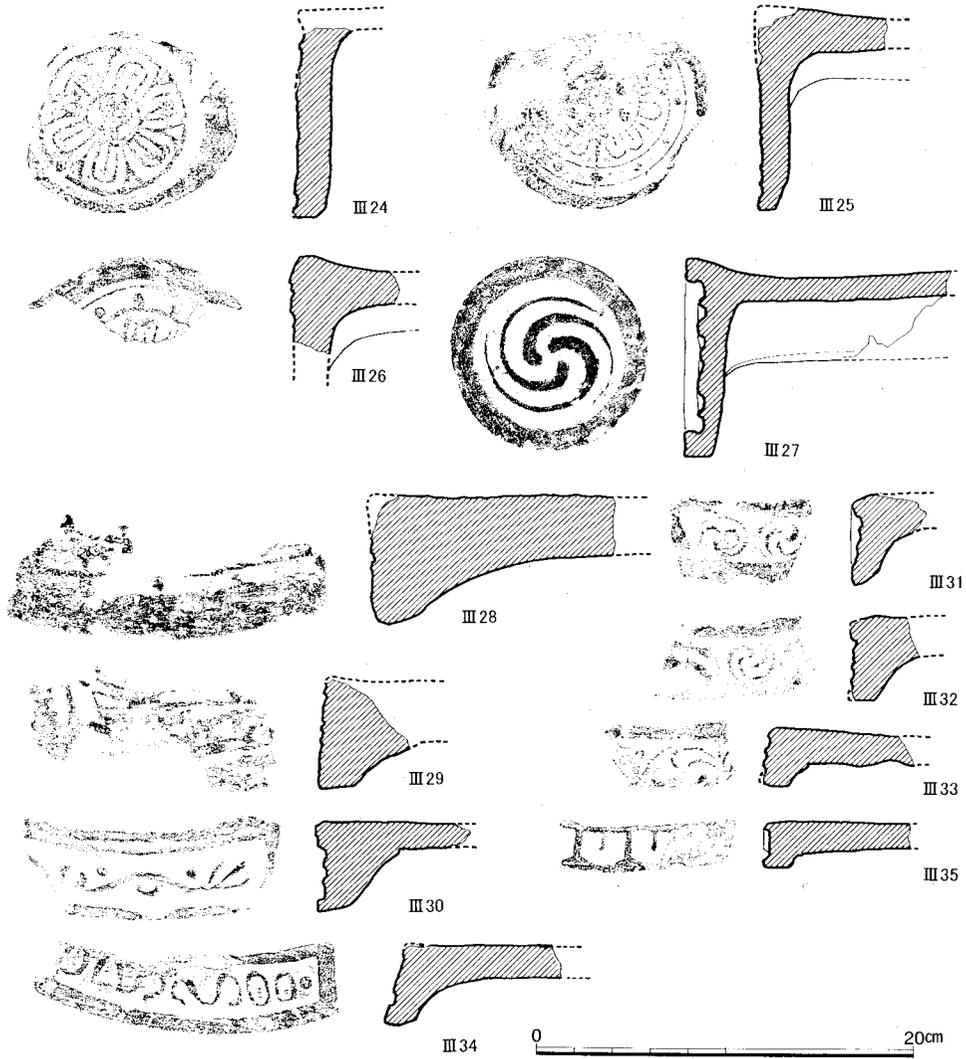


図18 軒丸瓦・軒平瓦

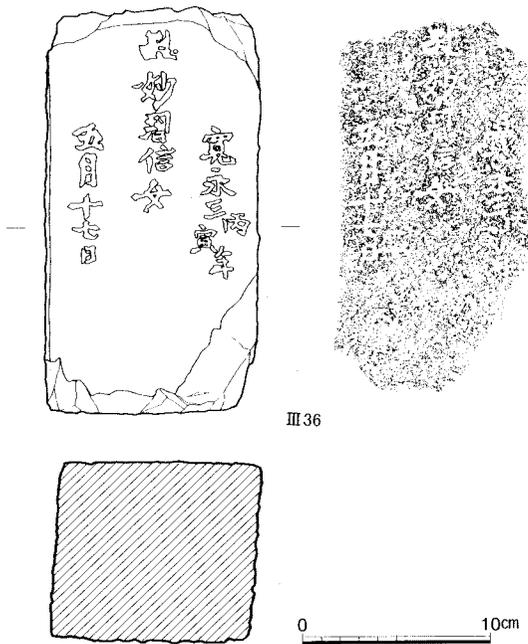


図19 近世の墓石 縮尺1/4

また、X地点においては、先述したように、築山整備工事の際に近世墓石が採集されている（図19）。墓石は凝灰岩を約10cm四方の方柱状に加工したもので、頂部を欠失し、長さ22cmがのこる。一石五輪塔の基部であった可能性もある。一面に墓碑銘が「寛永三丙寅年／~~癸~~（梵字）妙寶信女／五月十七日」と刻まれている。出土状況は一切不明であるが、完形の陶器灯明皿（Ⅲ22）、染付仏飯（Ⅲ23）が同時に採集されているほか、整備終了後の築山盛土内にも多量の近世陶磁器片が混じっていることが確認できた。これらは、墓石とともに攪拌の対象となった近世遺物包含層中に含まれていたものだろう。

う。近隣に近世墓が存在した可能性も考慮しておく必要がある。

#### 4 小 結

今回の立合調査の結果、上述してきたように、総合人間学部構内の北半一帯には各時代の遺物包含層が良好に遺存し、とくにA号館北側一帯には瓦溜をはじめとする遺構も残されていることが明らかとなった。また、鍵層となる黄色砂層のひろがる範囲と、それに覆われた弥生前期の地形環境が、部分ではあるが把握されたことも大きな成果といえる。今後発掘調査を実施していく上での重要な参考資料となろう。通例立合調査では、断面による堆積状況の確認のみにとどまる場合が多いけれども、可能な範囲で海拔データも含めた記録作成をおこない、それを広域に集積していくことの重要性が、あらためて確認されたといえる。